

懇談会「国土計画考」 - その17 -

出席：今野修平氏・国土計画研究会メンバー

日時：平成19年6月22日（金）

場所：ホテルプレジデント青山「ファンクションルーム」

A氏 ずっと国土政策の歴史をやっていたのですが、各論として7つくらいの項目の形でやっています。いまはその中の「国土政策と地域政策」というところで、ここは非常に大きなテーマなので、このところで少しとどまってやっているとこです。

では、今野先生、よろしくをお願いします。

今野 始まる前に、新しい国土形成計画がいよいよ実りの夏を迎えようとしていますが、5月16日の閣議で「ゲートウェイ構想」を決めました。僕も関心を持って新聞記事を見ていますけれども、どうも的確に伝わってきていないし、今度は「骨太」ですね。

それでは、「国土政策と地域政策」という大体のスケルトンを出して、話の都合で先食いしたり、脱線したりしているところがありますが、歴史が全部終わって、その次の段階に来て、10幾つかに分けたうちの5までは完全に終わって、むしろ6と7がこのディスカッションの本体になると思います。今日は本格的に「6．国土政策と地域政策」のところに入ろうと思って、メモをつくってまいりました。

この問題は、国土政策を考える際に非常に根の深い領域でございます。私が説明するまでもなく、国土政策というのは近代国家の体制の中に位置づけられて、今日まで、国総法もあり、それを引き受けて国土形成計画法になってきたわけです。「近代国家とは何か」というのは前にご説明したように、民族国家ですので、民族単位としての国家の成立ということなのです。

日本では明治維新政府が誕生して、それを引き継いで戦後の体制になってくるわけですが、いずれにしても国家というものが認知されたのは非常に古い。

日本ですら二千年近い歴史になってくるということですが、その中で基本的に違うのは何か。この辺から少し独断が入ってまいります、「国」という社会ができた。当然、一つの社会をつくれれば統治システムをどうするかという議論は必要なわけで、そのシステムから見たときの都市国家というのが単純に言われ過ぎているのではないかと思います。そこは西洋と東洋で基本的に違っていると私は認識しています。

それは何かというと、ヨーロッパの歴史を標準史と考えますと、2つの大きな流れから都市国家が生まれ出て、そして中世のヨーロッパの都市が発展してきた。それがルネッサンスを終えて近代社会につながっていくという形になっていると思いますが、2つの大きな必要性としての背景というのは、「安全保障」と「経済基盤」だったと思います。

内部的には安全保障と経済基盤の必要性は相互補完で絡んでいるわけですが、なぜ経済基盤として都市が発生して、日本の場合には都市が発生しなかったかという比較論でいきますと、交流の経済（交易の経済）というのが、ヨーロッパという狩猟文化の中で次第次第に盛んになり、豊かになってきたということがあります。交易、交流というのは、モンゴルのようなところすら「市」の場所が決まっています、そこにモノを集めてそこで物々交換し、それから貨幣経済化してくるということで都市が成立してくる。それが経済の中の最も甘い、おいしいところであったわけです。

そこは当然、敵に狙われます。日経の堺屋太一の小説でも、チンギス・ハンの歴史というのはそういうところを狙うための戦争史ですね。そうすると、それを敵から保護しなくてはならないということで町の市民が協力して、世界遺産になったところなんか、高い塀をつくって防衛するという安全保障が出てくるわけです。それは大変なカネですから、極力小さい形でその機能を果たす。そうすると、その塀はどうかというと「円形」なんです。それがヨーロッパにおける円形の環状都市の出発点になってくる。

中国の場合は私の勉強不足で、そういう経済的な背景をベースにした本を未だ読んでおりませんが、四角くなるわけです。そうすると、その狭いと

ころにたくさんの人が住むことから、その裏の課題は衛生問題が出てくるわけです。特に衛生問題が爆発的に大きな課題になったのは、近世のチフス事件です。それから都市下水というのが体系化して、上下水道がインフラとして最も重要だと認識されるようになってくるわけです。そうしたことがあって、さらに必要な行政需要をたくさん克服していかなければならないというので、都市国家になっていったことが、ギリシャ時代以来、日本に比べると一貫してあった基礎条件の違いだと思います。

一方、アジアの自給自足経済は、米山俊直氏の論からすれば、インド北部から日本列島に至るまでのアジア・モンスーン地帯 - - 京都大学が長いことこれに取り組んでくれているわけですが、そこはコメの文化であり、モンスーンですから雨水をどういうふうにもうまく処理していくかということでもあります。コメはヨーロッパと違いまして交易を生まないわけです。なぜかというと、連作障害がない。連作障害というのは、毎年つくと農作物というのは、コメ、他の二、三のものを除いては全部収穫が下がってしまう。小麦なんかも3年で1割になってしまうわけです。

A氏 それでヨーロッパは三圃制をとるわけですね。

今野 そうです。三圃制というのは、ヨーロッパの経済史からいくとものごい改革なんですよ。ルネッサンスと近代の産業革命に匹敵する改革が三圃制、三圃式農業の成立です。

コメは連作障害がないし、担当収量が非常に高い。食品としては、白米化する力がなくて玄米に近い形で食っているときは、完全食品なんです。ビタミンから植物タンパクからからみんな持っていますから。人類が持っているいまの作物の中で、コメほど完全食品はないわけです。戦後生まれは、その誤解の中で、わざわざ完全食品を捨ててパンを食っています。パンをつくるためにはバターが要る、塩が要るでしょう。で、高血圧患者が増えてきて、最近のような中性脂肪過多の世界になっていくわけです。寿命も短くなってくる。日本とア

アメリカの戦後50年の歴史を振り返ると、非常に面白いのですが、日本はパン食化する。アメリカは米食化するんです。そこも全く逆に進んでいるわけです。

ただ、欠点は一つ。労働力です。投下労働力と収穫との間が生産性を通して非常にシビアなのです。だから、一人でも多くの労働力を獲得したいし、労働力の制約がありますから、土地を広げようといっても単純には広がらない。

こういう話になって、私も大好きな話の領域の夜這いだとか（笑）、足入れ婚だとか、日本における中世までの母系社会論とか、日本におけるフリーセックスなんていうのは全部、米作の労働力と絡む話です。そういう社会で、一人でも農繁期が始まる前に来てもらって農繁期が終わる秋までいてもらおうと、余剰生産物が家として獲得できるということなのです。したがって、日本では結婚のシーズンというと、秋、11月に稲刈りが終わった後ですけども、事実の足入れ婚としてはみんな4月前です。田植えから何かで忙しいから働かせて、嫁を見て、これは働き者じゃないということと追い返す。そういうのがオフィシャルになっていたというのは、みんな労働力獲得なんです。

そういうことで自給自足型経済となるのですね。必要な水も、ヨーロッパでは都市において必要なのに、アジアでは田んぼで必要だったという話で、ケタが違うわけです。自給自足の結果、都市的な居住形態をとらない。したがって都市は生まれません。生まれた都市は何かというと、権力社会ができて、権力中枢として脱農化した貴族と、貴族の集積場所としての都市になってきます。それが租庸調で巻き上げて奈良、京都から始まるわけです。それが近代末の江戸までつながるわけです。あるいは城下町体制ということで農民支配の封建体制が長く続くのです。

これらの権力者は国土空間とのつながりは何かというと、非常に安定していて、完全食品で、ただし、投下労働力とシビアな競争の中で生産が展開される米作というのは、余剰生産力が一つひとつにすると小さいですから、薄く広く集めなくてはならないのです。これから非生産階層社会が出てきます。そのために都市支配ではなくて農地空間支配が始まるわけです。どのくらいの面積を持っているか。もっと極端に言うと、どのくらい田畑を持っているかというこ

とになってきて、これが、何万石体制の「石」で経済をあらわすというところまで来るわけです。そこが基本的に違います。

向こうは、都市社会が成立してきますが、その都市が社会に変革をもたらすのが近代的な技術の開発です。その技術の開発をさらに細かく見てくると、交通と武器です。それは何かというと、都市と都市が一定の距離をおいて成立していきまして、一般論として、この間は20～30キロです。ヨーロッパの社会というのはその間は農地なんです。家一軒建てないです。塀があって、日の出から日没まで門を開く。そして、守衛が塀の一番上に立つ。そうすると向こうから兵隊が出てきて、「兵隊が出てきたぞ、みんな帰れ」といって門を閉めて防衛に当たるわけです。

これが最も顕著に、私が説明するまでもなく出ているのはミレーの絵なんです、「落穂拾い」にしても「晩鐘」にしても。遥か向こうの町の壁があって、教会の塔があって、塔の一番上は見張り所なわけです。

A氏 フランスの州（レジオン）はみんな同じ面積ですね。

今野 そうです。したがって、農民がみんな城壁の中の都市に住んでいて、日の出とともに出て行って日没までに帰ってくるわけです。その範囲がコミュニティの基礎になってくるわけです。

A氏 それが現在のレジオンで、ちょうど同じ形の、同じ面積ですね。

今野 そうです。むしろこれの中の生活体系をどうするか、というのがコミュニケーションになってくるんです。今週もあるところで議論したときに、コミュニティ、コミュニティと、得意になってコミュニティ論を言っている人がいまして、どれを指してコミュニティと言っているのかよくわからないけれども、大体、ヨーロッパのコミュニティと日本のコミュニティは質が全然違うわけです。日本は水田の水支配ですから、田んぼに水を張った後、落としてもらって下の田

んぼに行く。さらに下に落とす。田んぼというのは、必ず1枚の田の端っこに、落とす口と入れる口とあるわけです。したがって、その水支配をどうするかというのが日本の空間支配の原点であるのに対して、向こうは安全保障と経済基盤です。

そこに近代革命で出てきたのが鉄道です。例えば20キロありますと、馬で走っても2時間かかる。したがって2時間の間こっちは態勢を整えられる。ところが、鉄道だと20キロは20~30分で来てしまうわけで、対応できないわけです。

鉄道と、もう一つは大砲です。ノーベルがこの20~30kmの都市分布を壊したわけです。ダイナマイトが発明されて大砲を撃つようになったら、こっちの町からあっちに大砲の弾が届くわけです。壊されてしまうわけです。その結果、これらの町々はそれぞれ経済基盤が異なっていて、町の真ん中の市場に集まって、物々交換したり何かして、これがMercado(マーケット)になるわけです。

それではダメだとなって、それじゃ連携しようか、一緒になろうかというところで、何を基準にして連携するかといったときに、「民族」に基盤を置いた社会をつくるわけです。ただ、民族に置かれるベースはどこにあったかということ、都市単位で見たときにはそういう形ですが、経済と安全保障を除くと、もっと広くみんなに共通して普及していたのは「宗教」です。一神教による宗教が広がるということです。

これはイスラムもキリスト教系も同じです。神を讃えるという形です。日本の場合は多神教ですから、そういう形ではつながらない。一集落単位でお寺があって、こっちは毘沙門天で、こっちは大日如来とか、もっと言うと、お地藏様とか、道祖神とか、それぞれ小さな神様をみんな持っていて、多神教とそれがうまく秩序立っていたわけです。そういう形で、なかなか広く共通化されないということがあったと思います。

一神教に依存してきて、都市社会が連携して民族社会が誕生してくるという形になったと思います。十字軍の歴史に名を残す聖ヨハネ騎士団もキリスト教を軸にスペインからドイツまで連携してロードス島に都市をつくったのです。

都市が孤立していた時代にこれが衝突してくるといのは、当然、民族間衝突で、現代社会の我々としては、ハンチントンの「文明の衝突」という民族間衝突につながるわけですね。こういうのが民族として固まらなくてはダメだ、それでないに対応できないとなって、近代社会が開かれてくる。したがって近代社会は「一民族一国家」という民族国家が現出した。こういう話になるのではないかと思います。

日本の場合には、この流れの必要性が全くなかったと言っていいと思います。同じ民族で、同じ言葉を使って、自給自足ですから、一人ひとりが1反歩の田んぼさえ持っていれば食っていけるという話で、ほかには迷惑をかけない。交流とか防衛ということは出てこない。したがって、たまたま防衛などが出てくると、それを契機にして日本の社会全体が崩れていくということが起こるわけです。また五反百姓が社会の基礎になってくるのです。

古代の防人にしても、豊臣秀吉が西国武士を動員して朝鮮征伐 - - 西国だけじゃないですね。伊達政宗まで引きずり出しましたから - - 朝鮮征伐という無理をやった後は政権が崩れてしまう、こういう話になってきて、西洋とは異なる封建社会の体質的な違いがあると思います。ここに書いてありますが、「孤立型小宇宙社会」、これが日本の歴史の体質をあらわす一つの特性ではないかと思うわけです。

グローバリゼーションは進んでいますが、世界を見ましようといっても、世界というのは地方から見ますと、東京経由での世界にすぎないわけで、東京さえ見ていけば間違いはない。自ら世界を見ようなんていうことは、視察旅行、観光旅行以外には考えないという形になりますから、直接交流なんてことは必要性が非常に弱い形の中で世界と接触してくるわけです。

ただし、歴史観でいきますと、その尺度というのは、いわゆる国民国家論的な見方といいましょうか、農民的な見方といいましょうか、それから見るとそうなんですけれども、支配者階層は特有の国家意識を持つわけで、それが19世紀に入って否応なしに異民族国家との接触を否応なしにされる。これがペリーであったり、ロシアであったりするという形で、国家的危機感というのを、支

配者階層、つまり全国の1割ちょっとの武士階層が持つようになる。これが明治維新につながっていった、形だけ民族国家としての体制を、敵の手がすいている間に打ち立てたのが明治維新政府ではないか。それが、植民地を逃れられた基本だったというふうに思います。

アメリカが急に手を緩めたのは南北戦争のせいですが、ヨーロッパはヨーロッパで、日本にかまっていられなくなるという間に近代国家をつくった。非常にラッキーだったと思います。

A氏 「孤立型小宇宙社会」というのをもう少しご説明いただけませんかでしょうか。

今野 日本列島だけが世界だと。日本列島だけで曼陀羅の絵を描いているわけですね。

C氏 中国の場合でも、ヨーロッパの場合でも、いくなれば大陸国家でしょう。大陸の中でのいろいろなやり方、民族論がある。日本の場合は完全に孤立した島国だったわけですね。

今野 そうですね。中国というのは海軍に弱いですから、東シナ海を渡ってこれなかった。そこから生まれたのが野口雨情の童謡だったりするわけでしょう。「異人さん」ですよ。ある意味で日本は現在の段階でも、ものすごい偏見がありますよね。戦争中は目の色が違う人はみんなスパイでした。それが平気で通っていたというのも、いくら戦争中といえどもものすごく異常な世界だったと、いまになって考えるとと思いますね。

それから、この間、堺屋太一の話聞いたけれども、それはいまだに続いていると、彼は言うんですよ。「こんなに世界からかけ離れている宇宙はありません」と。もう一つ、彼が言ったことでなるほどと思ったのは、30階建て以上の超高層ビル、これが日本に500あって、そのうち東京に350あるのだそうです。

その場合の東京は、行政区域の東京なのか、東京都市圏なのか知らないけれど。

ところが、上海では3,000あるそうです。上海に3,000の超高層ビルがあるというのは、日本の新聞が記事にしたことがないと言うんです。そう言われてみると、そういう上海の紹介はテレビでも新聞でも見たことないですね。いま、上海がつくっている地下鉄がちょうど300キロなんだそうで、東京の全地下鉄の8割を超す延長だそうです。だから、ほぼ東京と同じネットワークをあと2年間でつくる。駅の数約100とのこと。これは僕は別の情報で得たけれども、いま、中国で地下鉄をつくっている都市が80都市ある。そういうのは日本では全然ニュースとして流れないですね。世界のニュースといってもAFPもCNNもなく朝日・読売の特派員ニュースですし、大リーグ情報といっても大リーグ日本人選手情報でまさに井の中の蛙です。

だから、「孤立型小宇宙社会」というのは、認知されている言葉ではなくて、思いつきで書いたんですけど、別に官庁が悪いとか歴史教育が悪いとか、そんな話ではないんです。マスコミも含めて社会全体を覆う国民性というものでしょうか。

C氏 まあ、島国根性ですから。それは何かにつけありますよ。

今野 ありますね。閉鎖社会です。

E氏 同じ島国のイギリスとの違いというのは何でしょうかね。

C氏 イギリスは、建国に至るまでの民族の入り込み方が違うでしょう。日本はその経験がなかったんじゃないですかね。

今野 イギリスというのは、僕もドーバー海峡に何回か立ったことがあるけれど、津軽海峡より全然狭いからね。

それが一つと、ドーバー海峡というのは、バイキングを初めとする海上の交

通機関にとっては出入り口ですから、古代からものすごく交通があったところですね。だから、鑑真和尚じゃないけど、中国の海運が東シナ海を越えてなかなか来られなかったというのはケタが違うわけです。

A氏 ヨーロッパ大陸は本州みたいなもので、イギリスが北海道ぐらいのそういう位置関係ですかね。

今野 ええ。

A氏 もう一つは、アイルランドとイングランド、スコットランドでもものすごく交流がありますしね。

今野 地図を見てもらうとわかりますけれども、(ホワイトボードにて説明)ここにフランスのカレーがありますね。ここがドーバーでしょう。この根っこに、伊豆諸島並みの群島があるんです。それがジャージー島とかガーンジー島なんだけど、これはイギリス領なんです。僕は飛行機で行ったけれども、ロンドンからプロペラ機で1時間で行きますよ。気候がいいからリゾートです。ブリテン島に比べると全然気候がいい。

A氏 ノルマンディー公がイギリス国王になったわけでしょう。そのときにそれをとったわけですね。

今野 そうです。そういう歴史があるんでしょうね。それによってこの航行権をイギリスが取ったということでしょう。だから、ネルソン提督の勝利によって、イギリスが海上交通権を全部支配したというのと絡んでいると思います。ガーンジー島の歴史を縦軸で綴ってみたことはないけれど。

A氏 木村尚三郎さんが、ヨーロッパ人の心のルーツは中世だと仰っています

すね。その中世が、いままであまり勉強されていなかった。何か暗いという雰囲気があって勉強されていなくて、ホイジンガが『中世の秋』という本を書いて、中世をえぐり出していった。やはりすべてはルーツが中世だという感じがします。どうも、日本もそうじゃないかなという感じがしますね。我々の民族のルーツ、ものの考え方とか、文化とか、中世がスタートになっているような感じがします。

今野 そうですね。まあ、個人的な話だけれども、日本の中世、鎌倉・室町時代を細かに見ると、ちっとも京都の統制がとれていない時代ですね。地方史に立脚して中世を見ると、隣り近所との騒乱に次ぐ騒乱で、休む暇なしの時代です。

いま、同じ興味を持って、いろいろ調べているんですけど、例えば『下総・奥州相馬一族』という本を見ますと、これのうちの大部分が中世史なんです。江戸になってしまうと落ち着きますから、物語にならない。これは、相馬に合わせた細かい文献を全部並べて、どの文献にどういうふうに相馬が出てくるかということ、ものすごい騒乱ですね。

我々が学校の教科書だけ見ていると、南北朝なんていうのは、片や吉野に落ち着いていて、片や京都にいてと思っていたら、そうじゃないんですね。南北朝50年の間に、京都が南軍に占領されているのは6回か7回あるんです。1カ月だとか、20日間とか。なぜまとまらなかったのかというのは、国土計画上からは興味がありますね。

C氏 それにもかかわらず、最初に話された五畿七道や何かはその前からあるんですね。

今野 すごい統一ですね。

B氏 網野善彦さんは、「中世の日本海は交流の海だった」というふうにして、

「反対に見ろ」と言ってるじゃないですか。

今野 網野さんは支配者型歴史に対して反抗した立場ですから、「交流」なんだけど、その交流の量が全然違うんですよ。ただ戦争の歴史だけが書いてきたことに対する反論としては、「いや、交流もあったよ」と言うわけですが、対決姿勢を強化するためには、野党と同じで、わざと反対のことを言わないと誰も読んでくれませんか。

B氏 “網野左翼史観”ですから。

A氏 中世というのは、産業革命も起こっていないし、経済なんていう考え方も余りないわけです。人間が一番自然な形で生活している。たぶん、本性が一番出てくるんでしょうね。

今野 僕は、いままでの皇国史観に代表されるような支配者の歴史派じゃないけれど、皇国史観に代表される支配者の歴史だけで見ていると、戦争とかそんなのばかりが出てくるから、中国は海を渡る力がなくて、日本に来たのは元寇のときだけだという話になりますが、それを消去していくと「交流」がある。交流は現実的にありましたということになります。中世史を中心に東北を見ますと、十三湊を中心としてシベリア経由のつながりがあります。これはものすごく大きな量なんだけど、日本経済全体から見ると、その影響というのはこれぼっちですね。やはり自給自足で、コメだから。

アムール川をかって南へ下がって、十三湊へ来て、外浜（そとのはま）というのは、東北の中では格付けが、足利将軍にしても一国並みの扱いをされているところですが、そのくらい経済力があつたんでしょうね。それを經由して、景德鎮の瀬戸物だとか、毛皮だとか、消防で使っている纏だとか、ああいうのは皆それから来ているわけでしょう。いま我々が京都に行ったときの京都名物ニシン蕎麦まで、その文化なんですね。で、福井は国内におけるゲートウェイ

であったことは事実です。

しかし、それは日本経済全体から見ればこんなものですよ。当時、1,000万が500万いた日本人の大部分は、木の碗で飯を食べていたでしょうし、中国製の陶器なんて使っていたのはひと握りの貴族だけでしょう。

そういう意味で「日本海は交流の海だった」というのは、正しくもあり、言い過ぎでもあると思うのです。

E氏 十三湊が消えなかったら歴史は変わっていたんですかね。

今野 だけど、十三湊が消えた原因は外因と内因とがあって、外因は、シベリアがイワン雷帝によってつぶされてしまったというのが最大の原因です。内因は、地形条件や何かの変化もあるし、北アジアのモンゴルとの絡み（モンゴル支配）もありますし、いろいろありますけどね。

C氏 文化的に言えば、まさに日本海というのは一つの交流圏であって、浦島伝説もそうだし、つい最近も北朝鮮の4人の……、ああいう交流はものすごくあったんですね。

今野 直接来られる海運力がなかったわけですが、日本海岸と太平洋岸の基本的な違いは何かというと、井上靖なんか読むとわかるけれども、太平洋岸は時化に遭ったら死ぬ。届く先はアメリカ大陸までないのですから。ところが、日本海岸はどこかへ着くんですよ。

A氏 大黒屋光太夫の話ですね。

今野 そうです。

C氏 九州だって何だって、そういう話はものすごくありますね。一つひと

つ連続した形になっていないだけで。

今野 まあ、偏見のもとになるかもしれないけれども、今野のコンは、半島渡来文化の姓だと吉田東伍の日本姓名辞典には出ています。

遠い歴史から言うと一族なんですけど、ルーツが半島で分散化の中で出てきた分家名だから、生れは日本ということです。ただ、平民は140年前まで姓がなく、全員が姓を名乗ったのは極めて新しい。いい加減に命名されたのが大部分といたら言い過ぎですかね。

C氏 京都の文化なんてほとんどが、中国から何から……。今東光は「今」でしょう。

今野 一族が拡散して増えていったものだから、少しずつ、そういう絡む地名をつけたと吉田東伍は言っています。だから、金野と書いたコンノもみんな「今」から出ていったということですね。

E氏 男鹿半島の「なまはげ」なんてロシア人ですよ。

今野 それが昭和まで続いているわけ。僕は学生時代に、「三陸大津波」の後遺症という現地調査を先生について行ったことがあるけれども、三陸大津波の後、みんな女がいなくなるんですよ。男は船に乗っているから助かって、女は陸にいるものですから、津波にさらわれた。そうすると地域は嫁不足になるんです。三陸は行くと死ぬからというので、来る人がいないんです。それで内陸から身障者をもったり外国人の嫁をもらうわけですが、その大部分はロシア人ですよ。統計を取ると、ひどいときは村人口の10%以上の時代もあるんです。

A氏 産業革命とか経済があるから、経済原理で人間の本性から違う方向に

持って行ってしまった面がある。中世というのはそういうのがなくて、自然に人間社会ができてきているから、人間の心のルーツが生きている。

今野 先ほど網野歴史論が出ましたけれども、中世を見るのでも、一般庶民の立場から見なのか、支配者から見なのかということによって、答えがすれ違うことがいっぱいあるわけです。

A氏 そもそも、支配者側からつくったのが歴史ですからね。

今野 いままではね。戦後は、一般市民から見た歴史、それが近代科学としての歴史だと言われるようになって、歴史学というのはすごく変わったわけでしょう。2つのことから変わってきたわけですね。考古学というのが一つの力になって、それこそ自然科学の技術まで使った形で物的証拠をとってくるというものと、もう一つは、支配された側からの歴史をつくるということで、そのシンボリックな人間が網野さんなんです。

その支配された側からしますと、経済を支えている大衆は、殿様が誰になるうとあまり関係ないわけです。コメ作りですから、今年の気候のほうが大事なんです。生活が安定するか、しないか。今年の梅雨みたいに、晴れが多いときは豊作で、もう心配する必要はない。山芋なんか採りに行く必要はない、ゆっくり温泉に入れる - - こういう思考でしょう。

A氏 一般の市民にとっては、殿様が代わろうがあまり関係ないんですね。

今野 関係ないんです、穫れたものの何割かさえ納めていれば。

だから、これは司馬遼太郎が何かに書いていたけれども、関ヶ原の戦いは東西がぶつかり合った大絵巻物だということで、見学に来た市民が2万人だそうです(笑)。それは、国宝の関ヶ原の屏風絵があるでしょう、あれから推計した数値なんです。ちゃんと酒をぶら下げて、重箱を持って行ったんです。もちろん

ん泊まりがけですよ。それで、「あ、島津が逃げた」とか。

ところが、あれを読んでいて背筋が寒くなったけれど、僕の田舎で僕が小学生のときの最大の農民のイベント、何だか知っています？ 大森山という山一つが国有地であって、そこは陸軍演習場だったのです。その演習場での年1回の大演習、これが最大のイベントです。やっぱり重箱を持って見に行ったんです。

D氏 それが庶民なんですね。

今野 そう。それが昭和20年まで続いていたわけです。それで背筋が寒くなって、なるほどと思った。

B氏 横須賀に黒船が来たときに、江戸から庶民が弁当持ってもものすごく行ったらしいじゃないですか。大変だったとかで、幕府が制限したとか言うんですよ。

今野 江戸時代に有名な話はゾウね。ゾウを江戸に贈ったときは、見物人が集まって街道じゅう歩けなかったと。人々にとっては一生一度の珍奇な動物の見学ですから旭山動物園どころの騒ぎではない大事件です。

C氏 そのときに、それぞれ藩なり何なり都市国家的な体制があって、いろいろな行事に対してそこは何もコントロールしなかったということですか。

今野 関ヶ原の役のときは、あの国宝の屏風絵を見ますと、庶民が陣取っているところと軍が陣取っているところと、ちゃんと色分けされているんです。いまの運動会と同じですよ。観覧席があるんです。

E氏 日本の戦さというのはプロ同士の戦いでものね。アマチュアは関係

ない。

D氏 領主が代わっても、農民は常に作物だけ持っていかれるという。

E氏 ヨーロッパは、領主だけじゃなくて、そこに住んでいる全員が生きるか死ぬかという戦いですから、そこは全然違いますね。

今野 文化論で言うと、狩猟文化と農耕文化の違いなんですね。

D氏 網野さんの本では、百姓というのは悪い意味じゃないというふうに書いていますね。すごくいい生活をしている人たちだと。

今野 特に農耕文化の中でもコメの持っている文化でしょうね。それから、狩猟文化をベースにしたイスラム教、キリスト教と、コメをベースにした仏教のやさしさの違いだと思います。また裏返せば、仏教のいい加減さ、そこにあると思いますね。

C氏 それと、土地の所有制度にものすごく偏りがあったと思いますよ。そこがものすごく違う。農民は全部同じように豊かであったかということ、必ずしもそうではない。

今野 いや、貧しいんですよ。先ほど言った労働力との関係で、貧しいけれど死ぬことはないんです。そこが違うところだと思います。死ぬのは飢饉のときです。飢饉は何で起きたかということ、「天明・天保」は浅間山の噴火です。それから「やませ」だとか、気候・自然条件なんですね。

E氏 逆に言えば、城壁がなかったわけですよ。農民は別に城壁の中に逃げ込まなくても、死ぬことはないわけですね。戦さに巻き込まれることはない。

今野 むしろ戦争が起きるのを待っているわけです。死んだ兵隊から武器や衣服を略奪できるから。

E氏 それをさばく。

今野 古物屋に売って儲けた。だから、戦争に敗けた武将はみんな農民に首を斬られて殺されているんです、新田義貞にしても明智光秀にしても。

A氏 宗教に対する考え方もだいぶ違って、ヨーロッパ、特にキリスト教社会というのは、人間と神との間の距離が非常に遠いでしょう。日本の場合は近くて、場合によれば、例えば鎮守様とか八幡神社とか、人間が神になっていますね。ヨーロッパの場合とそこの違いがありますね。

キリスト教もギリシャ正教になると、イエス・キリストとの間の距離が短くなって、キリストが笑ったり泣いたりしていますね。ただ、ローマ帝国でキリスト教になったときに、一神教で絶対神で、神と人間の距離が非常に遠くなっています。日本の場合は、人間と神との距離が近いし、まあ、ええかげんといえええかげんですけど、多神教といえますかね。

今野 実は、宗教とか文化の格差というのは解釈が全然違ってくるので、そこをどう克服するかということをつかまないまま明治維新ができた。明治維新以降の近代日本というのは、質の点での立ち遅れを内蔵したまま形と体制だけから入っていった。したがって、天皇家をシンボルにした家族主義、日本の庶民がみんな持っていた家族主義、象徴としての天皇家、その末裔がそれぞれ一人ひとりだという家族型民族思想が背景にあった。これは朝鮮の思想と共通しているわけですがけれども、あとは、体制と支配の形から出ていくから軍事政権化していった。これが戦前の日本の姿だったのではないかと考えています。

同時に、いま中国大陸の状況を見ましても、あるいは立ち遅れた途上国というのは、軍の支配力を抜きにしては考えられないですね、どこの後進国に行き

ましても。

C氏 明治維新になったときに、徳川の一つの支配組織があった時代から切りかわるときに、象徴的なものをつくらなくてはいけないという話になっていったでしょう。

今野 象徴的なものをつくらないと、一つにならなかったでしょう。だって、私のふるさとなんて、司馬遼太郎が言ったように「くにあって国家なし」ですからね。日本なんかどうでもいいわけです、伊達藩さえ豊かになれば。この精神はいまや府・県庁の役人に徹底していますね、県境の先は一切知らんと。その意識が1億2,000万、ものすごい形で浸透しているわけです。

A氏 その辺がルーツにあるんですかね。いまおっしゃった府県の役人が、自分たちのテリトリーにしか関心がないというか、そこに注力して、グローバルな目を持とうとしない文化というのは、そこから来ているのですか。

今野 そこから来ていると思います。

A氏 逆に、市町村の人のほうが見る目が広がったりするんですね。

今野 権力を持っていないから自由なんですよ、対比論でいけば。

A氏 明治時代のピラミッドの文化が、府県の中には残っているのでしょうか。

今野 ええ。僕の田舎は郡単位で言うと、明治維新以降でも県境でしたからね。隣は福島県で、相馬藩なんです。自分は伊達藩。これはもう、東京の人にはわからないくらいの明快な線が心理的にあってね。言葉も違いましたから。

だって、敵のスパイが入ってきたらすぐわかるというのは、言葉を変えることですね。

C氏 たしか、そういう意識があったかなあ。僕は、原町だとか相馬の人たちとも随分話したことがありますね。

今野 そうですね。相馬や原町の人には「ほだべはア」って言うんですよ。「はア」をつけるんです。「はア」をつける言葉をしゃべる人は相馬の間諜なんです(笑)。もともと伊達の間諜は「ほだべエ」と、言い流しなんです。言葉がそういうふうに違います。井上ひさしの論説によれば、支配者がわざわざ言葉を変えるわけです。

A氏 鹿児島もそうですね。成り立ちの意味から言っても、府県というのは国家の一部として出てきたわけだから、そのピラミッド的な意識がいまだに残っているわけですね。

今野 それをさらに、戦後、首長を大統領制にしましたからね。これは一面において、日本人として、タテ社会型の人間としては、受け入れやすい体制だったこともあると思います。同時に知事の暴走が始まるわけです。

A氏 フランスの場合のレジオンというのは大統領じゃないでしょう。間接選挙だから、首相ですね。だから、全然そういう暴走がなくて、権限もないということですからね。

今野 もう一方で、コミュニティ論と絡むけれども、サンフランシスコ湾に調査に行ったときに、サンフランシスコ湾の流域の町村がサンフランシスコ湾の広域自治圏をつくっているんです。したがって、カリフォルニア州の面積でいくと約半分を占めます。それが権限的には「自治」ということをすごく意識

しているから、裁判所まで持っています。

例えば、サンフランシスコ湾を埋めたいとAさんが思ったとします。それに対してBさんが、あそこを埋められたのでは困るという立場だとすると、係争しますね。そういうのは全部、州の裁判所とか国の裁判所に行くのではなくて、そこに行って片づけるのです。裁判を傍聴したこともありますし、システムは一般の司法と同じ体制でやって、傍聴人の傍聴券も配りますし、すごい自治権だと思いますね。

A氏 それは正式の司法ではないんじゃないですか。もしそこで決着がつかなければ、州の裁判所に……。

今野 もちろん。湾利用についての司法権です。

A氏 前段階じゃないですか。

今野 前段階だけど、日本で言うと海難審判庁と同じだなと思ったんです。特定行政圏域の裁判なんです。だから、サンフランシスコ湾を埋めていいか悪いかなんていう判決は、一般の連邦政府のほうには基準がないから、そこに全部委ねているわけです。それだけ自治権が強い。それだけの自治権があれば、この州によっては死刑があったり、この州によっては死刑がないというのは当たり前だなと思いました。

B氏 徴税権も持っていますか。

今野 持っています。日本の裁判は、戦後の改革を経ても国が一手に握っているでしょう。地方自治体の地方分権と言っているけれど、司法・立法・行政でいくと、司法のほうは全然持ってないですね。立法は自治体の権限内の条例で半分。行政も半分で、行政は二重にかぶっている。したがって、日本の地方

自治体はあくまでも地方自治体で、地方政府になりきれていない。完全政府ではないというのが、一般法学の中の定説だと思います。

本当は地方分権の話というのは、司法・立法・行政の三権分立体制の中で、どういうふうに中央と地方であるのかというタテとヨコの相関関係をきっちり整理しないと、国民にはわからない話になってしまうわけです。それがないから、権力の争奪だけになってくるわけです。この税は国なのか地方なのかと、知事対官邸で奪い合いになる。

D氏 先ほどの、関ヶ原の戦いに重箱を持って来ている人と同じなんじゃないですか、日本の一般の国民は。別に徴税権が国にあったって、地方自治体へ行こうと、どうあっても自分たちが生きていく上にはあまり関係ない、という意識が強いんじゃないですかね。

今野 日本よりそういう意識が最も進んでいるのは、イタリアだと言う人もいますね。

D氏 イタリアのほうが地方自治が強いという意味ですか。

今野 いわゆる関ヶ原の観客ですよ。政府が何党がなろうが、戦争が起きようが起きまいが、イタリア人というのは平均すると、一家族、持っている美術品のストックで5年は楽に食えるのだそうです。骨董品屋に売れば。

D氏 GDPが低くても豊かなのはそういうところにある、という説明をする人がいますけどね。

E氏 銀行に預けないですからね、信用できないから。

A氏 確かに外から見ると家は貧しいけれども、中に入ると美術品ばかり

という家が多いですね。ベネチアとか。

D氏 よくわかりませんが、イタリア人でもフランス人でも、ワインの大したことのないものを講釈するじゃないですか。日本で、杜氏があって、たくさんいろんなところでお酒を造っているわりには、1升瓶1本としかカウントしないような、なんか大事にしないところがありますよね。

今野 ありますね。

D氏 まあ、最近でこそ吟醸酒だの何だのとなってきましたけれども。

今野 話を戻しますが、そういう形で近代国家を私は見ているのですが、もう一方では、日本人の社会、日本列島の社会がそのためにタテ社会化した。これは、土居健郎の『甘えの構造』とか、タテ社会論……。

A氏 中根千枝ですね。

今野 それから、機能分担と責任。つまり弱い自治意識。自治意識が育たなかったということ。前近代体質温存のまま来て、アメリカが占領してきたけれども、いまになってみると体質的な中身は手術できなかったというか、手術では手が届かなかったという形になります。したがって、歪（いびつ）な近代日本の民族国家というのは今日まで続いていて、国民意識はべらぼうに弱い。これが国土計画につながってくるけれども、国土計画なんて日常生活からは関係ないんですね、正直言って。国土計画というのはこんな形でつくって、こんな裏がありますよなんていって、カネを出してくれるのは都市化研究公室しかないわけです。

D氏 先ほどからの話は、幕藩体制の「藩」というばらばらの国が、明治に

なって形を変えて、廃藩置県をやったけれども、同じだったという話ですよ。

そのときに、僕が勉強した話では、日本の社会を体系化する - - 例えばブロック区分とか、東京遷都論とかというのが佐藤信淵の一連の本に出てきますけれども、大久保利通とかはそういうのを相当勉強したらしいですね。本そのものは江戸時代に書かれて、佐藤信淵はもう死んでいるんだけど、大久保利通から、まさにひとつまみのエリート集団が、「国家の体制どうあるべきか」というので随分参考になっているのではないかと思いますね。いまと同じですよ、ブロック区分とか。東京という呼び方も、まさに佐藤信淵が江戸のことを「東の京」といって東京という名前がついたとか、そういう理論的なバックボーンはそこら辺にあるだろうと。

ただ、実際上はまさに「くにあって国家なし」で、ばらばらの状態が続いているんです。象徴的な意味での天皇とかそういうものしか日本国を統べる手段がなかったので、天皇を中心とした封建体制を目指したのだらうなと思いますね。

今野 ただ、日本のこういう社会の体制の中で、権力が最も表面化するの、古代の統一国家誕生以来、下し文、おまえにこの領土をやる、本領安堵する、これだと思っんです。それが権力の象徴でしょう。

それ以上に困っているのは、「国民なきエゴ社会・会社社会へ」ということです。僕は、かつて日仏会館の仕事をやったりしたこともあったので、この間、フランス政府後援で日仏会館主催のシンポジウムに呼ばれてね。といっても、僕は聞くだけです。案内状が来たので行ったのですが、「東アジア社会の形成」という国際シンポジウムでした。フランスからも来て、韓国からも来て、日本からも出て。

そうしたらパネラーの韓国人が、「今回は東京で開いているので、ぜひこれだけは言っておきたい。韓国は日本の国連安全保障理事会の常任理事になることに絶対反対です」と言っんです。「それは感情論ではありません」と。毎日、敵と実弾込めた小銃で向かい合っている韓国にとっては、何があっても国の政

治の中で一番重要なのは安全を保障されることです。安全を保障されてこそ初めて、豊かな経済もあり得るし、家族との市民生活もあり得る、その安全保障の最後の頼りが国連の安全保障理事会だと。

ところが、「日本の人はどうなんですか？ 自分個人のことしか考えてないじゃないですか。せめて、会社のことしか考えてないじゃないですか。国を考えている人はいないじゃないですか」と。そんな社会にポストを差し上げたら、自分の首を自分で締めるようなものだ、だから投票できません、と。これは非常に説得力がありました。

A氏 韓国はいずれは北朝鮮と一緒にしようとしているわけだから、北朝鮮と韓国の間の問題を、日本が入った安保理事会で、日本が口を差し挟んでいくというのは絶対に許せないと。これは韓国は微塵も揺るがないですね。

今野 ええ。拉致問題はけしからんというのは、それは私たちも賛成しますけれども、そんなことだけの話じゃないんです、私たちは命を懸けているんです。これに対する日本政府のちゃんとした見解を我々は聞かされたことがない、と言うわけです。非常に説得力ありましたね。

そういう意味でそういう社会になっていっているところは、率直に言って非常に質の低い民族国家だと思います。そこに脆さがあるということが言えるのではないのでしょうか。だから、僕が国土計画論の歴史の中で一貫して言っていたように、民族全体として危機だというふうに感じるときに初めて国土計画的なことが機能するというのは、どうも歴史からいくとみんなそうで、それが日本ではいままで二回か三回あった。それは間違っていないのではないかと思います。

A氏 逆に、誰かに支配されることについてあまり抵抗がないんですね。

今野 そうです。だから、アメリカの属国になっても誰も抵抗しない。

E氏 上から下に与える社会というか、下知社会というか、全総にしても何にしても上がつくって、「さあ、これだぞ」と、全部与えていくのが日本の社会ですね。中世からずっとそうなんです。

今野 下につくれといっても、つくる気もないし、つくる能力もない。明治以降今日までのことを言えば、その補完を官僚がやっていたわけです。そういう社会だから、国会は別に自分の責任を感じていないんですよ、議員一人ひとり。

A氏 本当は官僚というのは支配者側なんですよ。

今野 執行機関です。執行者ですよ。

A氏 国会の政治家の問題は参議院に尽きると言うんです。例えばイギリスは、下院議員は全部地方から選ばれてきているから、国家のことよりも地方の利害損得を主張していますよ。

上院議員というのは、延々と、「大英帝国は」という形で、イギリスがどうなるかということ朝から晩までやっているわけです。定員もはっきりしないわけです。要するに、そこに来てしゃべっている人が上院議員だと。だから、本当にイギリスのことを考えているのは上院議員ですね。女王陛下だって上院にしか行かないでしょう。

日本の場合は参議院が衆議院の下部機関になっているから、これが一番問題じゃないですかね。衆議院が国家のことを考えないというのは、特に選挙の制度からいってもやむを得ない点があるのかなと思いますね。

E氏 まだ貴族院があったときはよかったわけですね。いまのイギリスと同じ方式ですけど、それがなくなった段階で意味がなくなっている。

A氏 アメリカの上院議員とかイギリスの上院議員に比べると、日本の参議院というのは極めて特殊で、機能していませんね。本当は参議院が、特に全国区という意味もあるわけだし、日本を大所高所から考えていくのでしょうか。

C氏 フィンランドは1院制でしょう。1院制で「何も不便はない」と言ってるからね。大統領も女性が出てきたりするし、自治体の長も女性がかなりの数いるでしょう。日本は代議士の数は何で決まっているんですか。あれ、3分の1にしてもいいんじゃないかな。

A氏 地方の議会は明らかに多過ぎますよ。そっちのほうが大問題でね。

E氏 確かに地方分権が機能しないというのは、県市町村というよりも、議会がきちんと機能しないところが大きいと思いますね。地方議会から見ると、国会はやはり大したものだという感じですね(笑)。

今野 イギリスの上院に代わるものとして、戦後の日本につくったのが参議院の全国区ですが、それが機能しなかったわけです。なぜ機能しなかったかということを考えると、とどのつまりは民族国家の素地の弱さだと思うのです。それで全国区がなくなって、比例代表になっていったわけですがけれども、同じ斜路を転げ落ちるようにして、いま、落ちているのが国家公務員ですね。国全体を考えるポストがなくなっている。それは、国家公務員自体が国全体のことを考えないで、自分の縦割りのこういうことしか考えていないということもあるけれども、そういう立場(椅子)自体も用意されなくなっている。

E氏 都市国家のところ、なぜ日本に自治がないかと考えると、向こうは中世にすべて「契約」で決まっていたね。契約社会で、領主とそこに住んでいる農民とのすべてが、ある意味一対一であったり、契約ですね。その契約を破ると大変なしっぺ返しを受けるという緊張関係の中で、ずっと社会が営ま

れてきたというところがあります。だからルールもあるし。

日本の場合は契約という概念さえない。上から下に下知して、それに対して何の疑問も持たない。したがって革命みたいなものも、せいぜい百姓一揆をやってお茶を濁しているという程度。そういう意味では、やはり契約というのがものすごく大きいのではないかと思います。

今野 そうですね。契約によって自分の意思をあらわすということがない世界だったでしょう。だから、握手の意味がわからなかったでしょう、ついこの間まで日本人は。

E氏 そういう意味で言うと、城壁がなくても平気な社会ですよ。読んだ本によると、マックス・ウェーバーは、「世界のすべての都市には城壁がある。ただ一つ、日本を除いては」と言っています。そういう意味では極めてユニークですね。

今野 都市というのがもともとない世界なんです。だから、なぜ内務省時代から都市局というのは長い歴史があるのかと調べていたら、ある人から、あれは都市局と言うからわからない、首都建設局と言えばズバリなんだ、と言われたことがあったけど。首都建設は明治維新政府の5大政策の一つですから。

A氏 岩手県の遠野なんて、ヨーロッパの城壁都市みたいな面がありますよね。周りは全部山に囲まれて、人の移動が少なくて、中のコミュニティがしっかりしている。だから、柳田國男の研究対象になったんでしょうけど。

今野 地理学の世界の中では、ヨーロッパの都市の城壁に最も近い日本の構造は環濠集落だということを言う人がいますね。

B氏 鎌倉は、世界遺産に「城砦都市」ということで手を挙げたんですね。

いまは、ちょっとうまくいかないので変えようとしていますけど。周りの山は全部、切り通しで、実は絶壁のように手で切っているんですよ。

E氏 城を築くところは、後ろに川を挟んで、前には寺とか、当然、そういうような要害を選ぶわけですが、それとヨーロッパの城壁のように、戦さが起これば、すべての人間と、ヤギとか動物まで全部城壁の中に逃げ込むというのはだいぶ違いますよね。

今野 ヨーロッパと似た考え方の環濠集落の思想が、山城から平地に城がおりてきたときにみんな堀を掘ったということになってくるので、むしろ都市として引き継いだのではなくて、城として引き継いだところは共通項としてつながりがあるかもしれません。外堀、内堀。

C氏 領民の安全をそこで確保するという意味合いは少なかったでしょう？

今野 ゼロですよ。だから、別世界なんです。

C氏 さっき木村尚三郎さんの話をしておられたけれど、エーグ・モルトという土地はラングドックの近くですが、あれからもうちょっとスペインに寄ったところですが、そこにはいまでも城壁がきちっとした都市がありますよ。

今野 城壁がきちっとした都市は随分ありますよ、ドイツにも。あと、ラテンアメリカのスペインの植民地。

C氏 木村尚三郎さんは「あそこが一番のモデルだ」と言うので、わざわざ行って見たんです。

A氏 日本も鎌倉・室町というのは、結構、契約社会的なところが強かった

んじゃないですか。例えば、頼朝と部下との約束というか、それが江戸時代になってピラミッド型になってきたでしょう。一つの家族的なところだから、そういう契約的な話が必要なくて、みんなが家族と家族の中でやっていく。

イギリスとフランスの契約の考え方はちょっと違いますよね。フランスは王政だからピラミッド型で、フランスの契約のほうが少し緩いんです。先ほどの城壁都市でいくと、フランスはいろいろな人の交流があったと思いますけれども、それにしてもフランスの契約のほうがイギリスより曖昧ですね。イギリスというのは、とにかく千年くらいずっといつも争っているわけです。日本の室町時代みたいなもので、イングランドとアイルランドとスコットランドというのはずっと争っているわけです。そういうピラミッド型社会と、契約社会みたいなところがあるのかも知れませんね。

今野 日本では契約社会というのは弱かったと思うんですよ。弱い原因は、交流経済が非常にウエートが低かったからだと思います。モノの売買というのが一般市民の生活の中で契約をもろに出すわけで、その一番典型例は、いまのフリーマーケットがそうだけど、売り手の値段と買い手の値段をぶつけ合わせて議論するわけです。それで納得の行ったところで握手して買ってくるわけです。これが原点なんですけれども、日本では、買い手と売り手の値段がぶつかり合うところがないわけです。いまのフリーマーケットに行ってもどこへ行っても、買ってあるとおりに売れるか売れないかだけの話になっているというところは、やはり弱かったと思います。

それから、支配者階層の中でもそうだけど、下克上の思想が充満しているときは - - これも司馬遼太郎の本には書いてありますが、日本最大の大嘘つきは、武士から見ると、織田信長と豊臣秀吉と徳川家康。あれの「下し文」、それから「約束を守らないこと」は、最たるものだと。

一番嘘をつかれたのは伊達政宗で、100万石契約を破棄されて63万石になって、息子を追い出したやつが10万石くれたから、73万石で妥協せざるを得なかったというところなんか、全然信用していないですね。司馬遼太郎の本を読む

と、長宗我部元親なんていうのは一番信用していない男で、そのために、力でもってひったくってこなくては何にもならないとかいうのに満ち満ちていた。これが下克上社会の典型だというんですね。

A氏 ただ、信長と例えば伊達政宗とかそういう話というのは、お互い対等ではないわけですね。相互契約じゃないですよ。これは大企業と下請企業の契約みたいなもので、契約としては不十分だったのではないのでしょうか。

今野 下し文をいただいたから安心なんて全くできなくて、そこでご機嫌伺いが始まるというわけです。それは中国文化の影響があったんでしょうね。こういう形になって江戸時代の賄賂社会になっていくわけでしょう。

B氏 いま、契約という話がありましたが、中世の謡曲の中にまさに「契約」という言葉が出るんですよ。いまの概念と同じかどうかあれですが、それは師弟の関係なんです。例えば、弁慶と牛若丸は契約の関係なんです。だから横同士じゃなくて、上下の関係が契約らしいですね。

今野 横関係がいかに弱いかなんていうのは、離縁状の話でも明瞭ですね。そういう意味では対等じゃないですものね、結婚なんていうものは。

E氏 そういうふうに考えてみると、下克上という言葉も面白いですね。そもそも下克上という言葉は外国にあるんですかね。下克上とわざわざ言わなくても、ヨーロッパではいつも下克上だった（笑）。

今野 ただ、下克上と書くと、庶民が力を持って支配者を倒したように思うけれども、あれ、実は支配者階層の中の下克上ですね。明治維新も下級武士が徳川と殿様を倒して実権をとっただけの話で、農民には何の関係もない話です。

A氏 都市マスもそうで、住民が全く理解していない（知らない）都市マスというのは何だろうと思うんです。だから、都市マス自体は意味がないと思うのです。ただ、それを議論する、つくるプロセスが大事だと思うので、行政だけでつくって、形だけのパブリックコメントをやって、これで「都市マスだ」というのは本当に時間とカネの無駄だと思います。

B氏 僕も、ある市の都市マスを2つぐらいやりましたけれども、明らかに過程しか意味がないですね。

A氏 パブリックコメントが全く機能しないでしょう。住民参加というのは全くないわけだから。みんなでとにかく考えてください、と。

B氏 一緒に考える過程でみんなが集まって、ああでもない、こうでもないということ自体は、何人かのまちづくりに関心のある人を生み出しましたよ。それだけは確かです。

今野 ただ、この日本社会の根底をつくっている農業が急速に崩壊してきたでしょう。水管理なんて共同体が機能しなくなってきましたね。それがどういうふうに変ってくるか。世代間でもものすごく違うわけです。

D氏 いま、霞が関の役人自体、東京生まれが多いから、さっきの話じゃないけど、国家意識が生まれにくい。地域意識なんかもないような現実で。

今野 「兎追いしかの山」ではなくて、「階段のぼりし中層アパート」となるわけです（笑）。そういう社会になってきているでしょう。そうすると、日本における公共とは何かとか、公共に対する奉公、献身とは何かというのは、急速に衰えてきているわけです。家族が崩れて親の権限がなくなって、地域社会が崩れてきて個人社会になって、泥棒よけも何もみんな個人の責任でやらなく

てはならない社会になるんですかね。

A氏 日本のコミュニティというのは歴史的にいつどこにあったんですかね。教科書的にいくと小学校区ですね。でも、江戸時代の隣組とか明治時代の小学校区というのは、つくられた区割りでしょう。自然にできたコミュニティが小学校区になったわけではないと思うんです。

今野 そこは明快なんです、水管理。田んぼの水。

A氏 最近の国民生活白書では、市民を中心とした人の集まり、これをむしろコミュニティと言う、というふうに書いてあるんです。

D氏 地縁ではないんです。要するに土地の空間的つながりではなくて、サイバースペースとかそういうものになっちゃうんです。

A氏 サイバースペースとか、市民サークルとか、それはコミュニティではないと言っても、国民生活白書、政府の白書にそう書いてあるんです。そこで初めてコミュニティができてきている面もあってね。

私も昔、ホームステイさせられたことがあって、アメリカ人の家にいると、コミュニティは宗教ですね。日曜日の朝になるととにかく家族全員で行って、午後はみんなで奉仕をするわけです。

私はそのAさんに、アメリカ人は大変ですね、ウィークデーは仕事をして、日曜日も朝は教会で、昼からは奉仕をして、自由な時間はないじゃないですかと言ったんですけど、それがコミュニティなんですね。

D氏 イギリスでも田舎暮らしみたいなのが流行っていて、都会から田舎に移住するじゃないですか。何をやってコミュニティに認められるかという、教会の掃除とかそういうところから入るらしいですね。まずはそういうコミュ

ニティの核のお手伝いをすることでとけ込んでいって、田舎暮らしができるのだと、そんなことを聞いたことがあります。

B氏 日本でもそうですよ。「道普請」なんていうと出なければいけない。出て初めてコミュニティに入れられるわけです。

D氏 いま、道普請なんてあるんですか。

B氏 やってますよ。僕がいま行っているところはまさに道普請。

E氏 教会というのは、大きさとしては小学校区と同じようなものですか。もっと大きいのですか。

今野 小学校区なんていうのは都市的な見方なんですよ。農村的な見方は水の流れですよ、上流から下流まで。田んぼの水にどの水を使っているか。こっちの沢か、こっちの沢かによって変わるわけです。だから、大きさは大から小まで、場所によっていろいろあります。

E氏 流域ごとというほどではないでしょうけど、そういう感じで教会ができているんですか、自然に。

今野 だから、水の管理がうまくいかないと横同士で戦争になります。それが水争いです。これはものすごいんですよ、武器を使って。

A氏 確かに一神教で絶対神だから、地域に行ったらそこの教会というかわかりますが、日本の場合、いろんなお寺さんがあるから、お寺に掃除に行くと行ってもどこに行ってもいいかわからないですね。

今野 だけど、僕の弟が「墓を売ってくれないか」とお寺に行ったら、「1年間、お寺へ来て奉公しなさい」って。

A氏 では、今日はここまでにします。(了)